



## カンボジア精神医療の今後の展望と課題

### ～ 発展途上国における 10 年間の NGO 活動を踏まえて ～

新緑の輝く季節となりました。新年度がスタートしてから 1 カ月過ぎ、GWで一息ついている頃ではないかと思えます。ここ最近では温暖差があり体調も崩しやすい陽気ではありますが、皆様が元気で過ごされるよう願っております。

さて、2010年度でSUMHは10周年を迎えます。そして本年度より始まる新プロジェクトは、早ければ今月末にはスタートするという段階にきております。今年は目が離せない年になりそうです。そこで本号ではSUMHの新たな飛躍の前に、今までの10年間を振り返り、「SUMHの過去と今後の展望」について皆様に知っていただきたいと考え、各理事の皆様に寄稿をお願いいたしました。今号では、青木理事長、手林理事からの寄稿をお届けします。

\*\*\*\*\*

#### 1. カンボジア精神医療の支援活動の展望と課題

理事長 青木勉

#### 2. 人間的で長い関わりこそ NGO 支援の本領

- NGO としての SUMH の活動の展望と課題 -

理事 手林佳正

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

#### 3. 編集後記

篠原 慶朗

発行: 途上国の精神保健を支えるネットワーク

Supporters for Mental Health; SUMH

\*\*\*\*\*

### カンボジア精神医療の支援活動の展望と課題

SUMH 理事長 青木勉

SUMH 会員の皆様におかれましては、ご健勝にお過ごしのこととお慶び申し上げます。SUMH は、カンボジアで活動を開始してから、御陰様でちょうど10年が経過しようとしております。これもひとえに会員の皆様方の御支援の賜物と心から感謝しております。

21世紀は、心の世紀と呼ばれております。しかし、世界を見渡しますと、保健の領域でも国際協力の領域でも、心の問題は常に後回しにされがちです。特に、途上国の大半で、精神保健サービスはほとんど整備されていません。一方、大災害・内戦・貧困等といった途上国に特有な問題は多く、先進国とは違ったストレスや困難に直面しているといえます。

SUMH は、1997年に日本での精神保健分野での経験を途上国に紹介しながら、途上国の人々共にその国の適した精神保健体制を考えて行きたいと願って設立されました。そして、2001年にカンボジア・シェムリアップに現地事務所を開設し、現地スタッフへの精神保健医療の教育を開始し、6名の心理社会リハビリテーション実践家を養成しました。また、デイケア、その後シェムリアップ州病院内にメンタルヘルスリハビリテーションセンターを開設し、通所活動や集団療法、家庭訪問を開始し、他のNGOとも協力して、精神保健医療の啓蒙活動を行っています。そして、2006年からは、カンボジア人の代表が中心となって、活動を続けてきています。

私自身は、総合病院の精神科に勤務して、約20年がたち、丁度その後半がSUMHの活動と重なりませぬ。特にここ10年間は、日本の精神医療にも大きな変革がありました。病院から地域への移行、脱施

設化の流れが鮮明となったことです。総合病院の精神科では、一般医療との差別を認めていたいわゆる医療法特例が改正され、精神科が内科や外科等の一般科と同じマンパワーを持つことが可能となり、仕事の内容も以前と比べ高度に複雑化したものが増えました。また、バブルの崩壊や日本社会のグローバル化の影響もあって、いわゆるサイコバブルが到来し精神科外来に患者が殺到するようになっています。また、医師の卒後研修の義務化により、医師不足と偏在に拍車がかかって精神科のみならず一般科でも地域医療が崩壊し、現在も改善の兆しは見られていません。このような中で、SUMHの活動を続けてきました。では、SUMHの目指す目標は何でしょうか。私は、カンボジアの人々が、自らの手で自らの心の健康を守ることが出来るように、彼らと共に考え行動しながら、同時に日本の精神保健医療にも貢献して行くことと考えています。そのためには、カンボジアでより包括で有効な精神保健医療の支援を行う必要があります。具体的には、メンタルヘルスの啓蒙と促進、精神科医をはじめとした精神医療関係者の教育、ユーザーとの連携等あります。

これらの目標を達成するためには、まずプライマリヘルスケアの中にメンタルヘルスを位置づけることが必要です。今年度から、カンボジア人の大部分が生活する農村部にあるアンコールチュム病院でカンボジア人スタッフにより精神科外来を開始し、農村部での精神保健医療サービスのモデルを創る予定です。そのモデルを基に、カンボジア全土でカンボジア国民の多くが、精神医療にアクセスできるように活動を広げて行きたいと考えています。また、教育の普及に関しては、他の団体との連携も重要です。昨年、カンボジアで開催された精神科国際セミナーも、環太平洋精神科医師会議やNPOであるカンボジアTPOとの協力により実現しました。先月も、環太平洋精神科医師会議のメンバーであるブリティッシュコロンビア大学のソーマガネサン教授、大正大学の野田文隆教授と、カンボジアへの有効な精神科国際協力について話し合い、より包括的なアプローチが可能となるように協力して行くことで一致しました。ビジョンを共有する他の団体との協力によって、国際精神保健活動を大きな潮流として世界に広げて行くことが出来れば、どんなに素晴らしいことでしょうか。

そして、これらの目標を達成するために最も重要なこと、それは会員の皆様からの御支援です。より多くの会員の皆様にSUMHの活動に参加していただきたい。草の根の支援として、是非活動に加わっ

ていただき、経済的にも会員の方々に支えられたものにして行く必要があります。そして、私たちの活動を日本のみならず他の国々の人々に知っていただき、日本の精神保健医療にも貢献していくべきです。そのために、現在、SUMHの活動についての出版物の発行等企画しており、会員の拡大にもつなげて行く予定です。

今後も、会員の皆様の変わらぬ御支援を宜しくお願い致します。



2009年11月のスタディーツアーの様子：  
当事者の自宅を訪れる青木理事長(写真右端)

\*\*\*\*\*

**人間的で長い関わりこそNGO支援の本領  
- NGOとしてのSUMHの活動の展望と課題 -**

**理事 手林 佳正**

これは6月頃発行予定のSUMHカンボジアプロジェクト開始10周年記念誌に向けて書いています。

SUMHは1996年に東京で4人-岩間邦夫・氏家靖浩・大賀達雄・手林-が集まって誕生してカンボジア精神保健事情の調査に入ることを決めた。異文化状況や社会制度の違いなどを的確に把握すべきという考えからだ。幸い研究助成が3年間に亘って3つ取れて、カンボジアの精神保健をめぐる調査-唯一の精神科外来の受診経路・これも唯一の児童精神科に遊戯療法を導入したときの効果測定・治療僧のいる寺院での精神ケア実態-を実行できた。これが第1期だろう。そして実際に現地でのプロジェクトを始めると決まり、シュムリアップで開始したのが2001年だから、確かに今年は10周年記念だ。

SUMHの経年的な活動区分			
	活動内容	日本人駐在者 (1年以上)	カンボジア人スタッフ
第1期 1996-2000	SUMH 設立。 3つの現地調査を手林と岩間が担当。	なし。	ヒアック カモル
第2期 2001-	シュムリアップに事務所設立。 2つのプロジェクト地でベースライン調査。	手 林 梅 野	ヒアック カモル ピサル ソリダ ボリン ヴァンナ チャンナ ムサ ピセッサ サーリッス ティア ソウ ン ポウ ポブ
第3期 -2003	日本からの20数名の講師の協力を得て 地域精神保健活動の専門家養成。(これは 国の認定資格となる) 訪問やなどの地域精神保健モデル活動。 カンボジアで英文研究雑誌を発行。	手 林 梅 野 平 野 広子	ヒアック カモル ピサル ソリダ ボリン ヴァンナ チャンナ ムサ ピセッサ オウン ティア ソウン ポウ ポブ
第4期 -2006	通所デイケア。 訪問の地域精神保健モデル活動。	安 田	ヒアック カモル ピサル ムサ オウン ティア ソ ウン ポウ ポブ
第5期 2007-2010	シュムリアップリファラル病院内に拠 点を移し、後にドナーの寄付により独自 建物を建設。そこでの通所活動。SUMH カンボジアを設立して現地化。ピサルの 日本研修。PRCP 研修の開催に協力。	なし	ピサル バナック CCMHSより1人 ティア
第6期 2010-	シュムリアップ病院内の通所活動。 アンコールチュム・リファラル病院での 精神科巡回診療と地域ケア。	なし	ソバンナラ ピサル バナ ック CCMHSより1人

公募して決めた梅野明恵さんと手林がカンボジア・プノンペンに入った。シェアの事務所の協力を得て、運転手募集や4WD車の購入などをし、そのクルマに荷物を山積みにしてシュムリアップに入った。事前調査のときのスタッフ2名 - ヒアックとカモル - は引き続き現地スタッフとなることになり、強力な中心的な現地スタッフになった。現地日本大使館のNGO活動支援と研究助成、大口個人寄付が頼りの出発だった。プロジェクト地の精神保健事情や住民の精神保健意識、地域保健事情などのプロジェクト開始前のベースライン調査に半年をかけた。それが第2期。

心理社会リハビリテーションの専門家養成をしながら、2つのプロジェクト地での地域精神保健活動のモデル事業を開始、これが第3期で2003年秋に終了した。最終年には財政が苦しくなって賃金の遅配や、日本人には放棄も求めることになった。地域活動が中心事業になった安田章子さんが駐在員であった第4期。そしてJICA助成が現実化してシュムリアップ州病院(リファラル病院)内に活動拠点を

を移した第5期に区分することができる。SUMHは財政健全化のために、またプロジェクトのローカル化を目指して日本人専門家駐在を置かなくなった。そしてこれからが第6期である。

こうした一定の長さのあるカンボジア精神保健状況への支援的な介入は、カンボジア側に多くの知人や支持者を生み出してきた。一緒に働くNGOスタッフを含み現地で築いていく人間関係は、国際的な支援に関わるものにとって大きな喜びだ。しかし、公的地域活動に精神保健活動を含ませていくためのモデル活動をいう意味では未だ達成していない。

支援継続期間でみると、NGOの活動はJICAを含むODAや国際機関のプロジェクトが数年で終了することと比べ、腰をすえて長く関わり続けることができるという良さがある。一方、資金面ではODAが短期であっても大量であるのに比して、NGO活動の財政基盤が小額で、かつ脆弱で不安定であることであり、プロジェクト内容とともに財政を確立する工夫がNGOプロジェクトの命ともいえる。ここ数年

は景気悪化の影響もあって助成金の獲得額は年々減少している。そしてその予算に規定されて、現地への技術支援の要請に十分には答えられていない

そこで新たに毎年、SUMHの活動について印刷物を発行して途上国の精神保健支援の情報の共有を試みます。支援の輪を広げる努力のために、この冊子をご活用願えたらと切望しています。

そして5年後10年後にはSUMHカンボジアが財政的に自立して、日本からはさまざまな技術支援やスタディツアーなどで関係が続くことを夢想しています。

末永いご支援をよろしく申し上げます!



2009年11月スタディツアーの様子:  
当事者の自宅を訪れた際の手林理事(写真右端)  
\*\*\*\*\*

**SUMH Cambodia**

*Actual Address,*  
Mental Health Rehabilitation Center,  
in Siem Reap Provincial Hospital,  
Mundol Moi, Siem Reap, Cambodia  
*Postal Address:*  
P.O.Box 93102 G P O Siem Reap Angkor, Cambodia  
\*\*\*\*\*

SUMHの会員として、また募金によって一緒に途上国の精神保健を支えてください。

【年会費】一般 10,000円 賛助・学生 5,000円

**【会費・募金の振込先】**

**銀行振り込みの場合**  
銀行名;千葉興業銀行 旭支店  
口座名;途上国の精神保健を支えるネットワーク  
理事 青木 勉  
口座番号;普通 1031181

**郵便振替の場合**  
加入者名;途上国の精神保健を支えるネットワーク  
口座番号;00170-2-535294

郵便振替は振替用紙に、住所・氏名・Tel & Fax・E-mail・会費と募金のいずれか・SUMH へ一言を明記の上、お振り込み下さい。

\*\*\*\*\*

**SUMH日本事務局**

〒130-0013 東京都墨田区錦糸2-6-10 エクセル錦糸ビルB1  
TEL 03-3812-0736

HP: <http://sumh.org/>

\*\*\*\*\*

**編集後記**

この度は前任の岡一郎さんから引継ぎ、編集主幹に立候補させていただきました。3月半ばの理事会の席で、「今の私に何かお手伝いできることは?」と考えた時に自然と手が拳がり引き受けさせていただくことになりました。重要な職務を私に一任していただいた皆様に感謝しております。今回、理事の皆様にはご多忙の中、原稿の執筆を快諾していただきましたこと誠に感謝しております。メールで送られてきた原稿に目を通すことでSUMHの活動とその理念について理解を深めさせていただきました。

今号を作成して私を抱いた感想は、文化の違うカンボジアで、SUMHが展開する精神保健活動から目が離せないということです。私も時間が許す限りSUMHの活動に参加し、自分の目で現場を見て考えることを続けていきたいと思っています。そしてこの号に目を通していただいた皆様の中で、もし私と同じような感想を抱き、国際精神保健活動に興味を持っていただけた方がいらっしゃるようでしたら、是非、私たちの活動に参加してみませんか。本年度から新たに第6期が始まり、スタディツアーも敢行する予定です。現在、SUMHは一人でも多くの支援者を必要としています。国際貢献を通じて、皆で悩みを分け合い、皆で喜びを享受する。そんな仲間が一人でも多く増えてこの活動が大きな輪になっていくことを期待しています。

次号は、橋崎さんのカンボジア奮闘記『橋崎さんカンボジアへゆく~プロジェクト開始の現地の様子を語る~(仮題)』を掲載予定しております。乞うご期待ください!

篠原 慶朗